2022. 1月第638号

アシュラム
ASHRAM

発行所　アシュラムセンター
523-0894 近江八幡市中村町 567-2
Tel 0748-33-4030
Fax 0748-33-8856
アシュラムセンターホームページ
www.ashramcenter.jp
編　集　アシュラム誌編集委員会
振　替　01050-6-53772
アシュラムセンター
印　刷　明文舎印刷商事（株）

解　題

アシュラムとはインドの言葉で「退修」という意味で、スタンレー・ジョーンズ博士によって日本に紹介されたものであります。祈りの生活をもってみ前に自らを整え、今日に於ける主のご委託にこたえんというのがその願いです。

瞑想

来なさい。そうすれば分かる

ヨハネ1：39

主幹牧師　榎本　恵

ヨハネによる福音書は、イエスの最初の言葉を「何を求めているのか」（1：38）という大変興味深い言葉を持って記し始める。洗礼者ヨハネの弟子の2人（ひとりはアンデレ、もうひとりは著者ヨハネ自身ではないかとの説がある）が自分の後に従ってくるのを見て、発した主の言葉。それに対し、彼らは「ラビ、どこに泊まっておられるのですか」（1：38）と尋ねる。「何を求めているのか」という深淵な問いかけに対してのものとしては、何ともお粗末な答えのようにも思えるのだが、それに対して、イエスは「来なさい。そうすれば分かる」（1：39）と言われるのだ。

これが、今年最初のローズンゲン黙想箇所である。

それにしても、イエスのこの言葉が、その宿泊場所を見に来なさいというだけの言葉であるとするなら、それはあまりにも薄っぺらい理解ではないだろうか。実際、この言葉を、岩波の『新約聖書翻訳委員会訳』では「留まる」と訳す。「ラビ、どこに留まっておられますか」。そう記すと全く別の意味が浮かび上がってくる。しかし、それは単に訳語の問題ではなく、この弟子たちとイエスのやり取り自体が、生の流れ、時の流れの中で自らを捉えるという意味を含んだやり取りと読むことができる。

彼らが最初に師事した洗礼者ヨハネは、荒れ野に住まい、「らくだの毛衣を着、腰に皮の帯を締め、いなごと野蜜を食べ」（マタイ3：4）、来る者たちに悔い改めの水の洗礼を授けていた。しかしそれとは対照的にイエスは「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが人の子には枕する所もな」（マタイ8：20）く、また「見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ」（マタイ11：19）と揶揄され、しかし「人の子は失われたものを探して救うために来たのである」（ルカ19：10）と旅されたのだ。その姿を思うとき、「来なさい。そうすれば分かる」（1：39）と言うイエスのこの言葉は、全く違った響きを持って、私たちの心を惹きつけるのではないだろうか。すなわち「どこに泊まっているのか」という問いは、その場所にあるのではなく、むしろどう留まり、どう生き続けるのか、という従う者の姿勢を問う。「どこに住み、何を食べ、何を着、何をしているのか」ではなく、「どう住み、どう食べ、どう着、どう生きるか」それこそが、主が、来れば分かるといわれたことなのではなかったか。最初の弟子たちが、見て留まり、そして従ったのは、このイエスの生き方そのものであったのだ。

漂泊の俳人松尾芭蕉。「舟の上に生涯をうかべ、馬の口をとらえて老をむかふるものは、日々旅にして旅を栖（すみか）とす」（『おくのほそ道』序文より）これが彼の留まった生き方であった。46歳で江戸を経ち、奥羽、北陸を巡ったその旅は、全長2400キロにも及ぶ、150日余りの旅であった。彼は、各地の名所旧跡を訪ね、門人たちと出会い、そこに逗留する。しかし、時には野宿同然の旅の中で、「啄木鳥（きつつき）も庵（いほ）は破らず夏木立」、「蚤虱（のみしらみ）馬の尿（ばり）する枕もと」、「一家（ひとつや）に遊女も寝たり萩と月」など名句を生み出すのだ。それは決して諸国漫遊のお気楽な旅ではなく、まさに「旅に死せる」ものの姿であり、そこに留まった者だけが知る漂泊の境地であったに違いない。何者にも支配されず、自由なものとして生きる。それは、私たちにとって憧れであると同時に、恐怖でもあるのだ。しかし、それは、来て見なければ、決して分かるものではない。

友よ、自分自身が何を求め、どこに留まっているのかを振り返ってみようよ。そこは主が「来なさい」と誘われるところなのか。それとも自分の行きたいところ、見たいところなのか。

新しい年の初め、主の声に静かに耳を傾け、その主のもとに留まるものとなろうよ。

第46回加太アシュラムに参加させていただいて

髙尾　恵子

快晴10月21日～23日、和歌山県加太国民休暇村での第46回加太アシュラムに参加いたしました。姉（米田康子）と一緒のつもりで安心していたのですが、透析21年ともなると足腰が弱って、口は達者なのですが、姉はやはり、断念せざるを得ませんでした。私も広島から一人で出席するのは不安でしたが神様が共にいて下さると祈り、信じて、参りました。

オリエンテーションで黒田朔先生の「いつも手にあって喜びなさい」一人一人が遣わされている生活の現場で常にそうありたい。私一人では出来ないが、主と共になら出来るかもしれない。私はこれから三日間の事を思うとワクワクしてきました。ファミリーが決められ大串家長さんの心の広い穏やかなお人柄に安心し、ファミリーの皆様とも何でも聖書の事を話すことが出来ました。２０２０年12月に会社を退社し２０２１年１月からは、私は聖書以外（主人一人おります）は、なにも有りませんでしたが、私は求めていたのでしょう。聖書、ローズンゲン（日々の聖句）、アシュラム誌、風韻、注解聖書、貪るように読みました。感謝でしたが、何か、もっと、と思っておりました。黒田先生の奨励で、神さまがこんなつまらない私に気づきを与えて下さる。いつも手にあって喜んでいなさい。と聞かせて下さり、神様ありがとうございますと涙がこぼれました。こんな私を神様は見捨ててられなかった。朝、昼、晩と聖書を読み祈り、み言葉がスポンジが水を吸うように心に入りうれしくて、嬉しくて、私の居場所は聖書と祈りのあるココだと感謝いたしました。あっと言う間の三日間、黒田先生、寺尾先生、唄野先生、西川さんありがとうございました。

お食事、最高!!

瀬戸内海を高台の休暇村から望み紀淡海峡の絶海が見えました。

（府中アライアンス　教会）

皆様からのお便り　感謝してご紹介します

向井　浩子

イエスは主なり

いつもお祈りに憶えていただきとても心強く嬉しい想いです。この度は、私のために誕生日を憶えてくださり、ぎっしりと多くの方々のお祈りが…。とてもとても嬉しく拝受いたしました。

すっかりご無沙汰致しております。オリーブの里アシュラムも…。２０１９年５月に発病し、今は足の自由がきかず、リハビリを受けています。

オリーブの里アシュラムは続けて参加したかったのですが、とても残念です。皆様に是非お会いしたい思いで一杯です。

アシュラム誌の池谷治朗兄のお証しに、またこの度の誕生日カードに治朗兄の名が連ねられていたことに、感動いたしました。ありがとうございます。

兄の証しの中の言葉でいろいろ教えられ感じましたが、特に「存在について」の言葉に心動かされ励まされました。存在の意味、何かをしないと存在意味がないと思われるけど、何もしなくても存在の意味がある。…出来なくてもやっぱり神様が受け入れてその存在自体が愛なんです。

すばらしいメッセージですね。

私もこれから池谷兄のことを日々お祈りさせていただきます。

私たちは日々家庭礼拝の中で今年は詩篇をくり返し聴いています。その時保郎先生の一日一章を合わせて聴いています。40年以上もたっていますのに、尚新鮮な思いで必ずイエス・キリストが示されているメッセージにいつも感謝しております。

いつの日かアシュラムセンターへ是非伺いたい、そして、修道場アシュラムにも参加させていただきたい思いでいます。その節は又よろしくお願い致します。

（日本バプテスト連盟　上尾キリスト教会）

2017年秋オリーブの里アシュラムにて。恵師隣が浩子姉。小金井姉、向井瑩治兄。

日光オリーブの里アシュラム　証しの時 ①

金山　良雄師

皆様、遠い地より来ていただきましてありがとうございます。オリーブの里は、コロナ前までは年間5000名ぐらいの方が各地から来られていました。

ここは、前は全部山だったんです。大木があり、掘っ建て小屋もあり。そこで寝ていると虫が入ってきたり…。その時に、「受け入れなさい。受け入れなさい。」という神様の声を聞きまして、それでこのオリーブの里が出来上がりました。

日光オリーブの里玄関にて。下段中央が金山師。

神様のお仕事というのは、私が想像する以上に簡単でして…神様の手にかかれば…何せ、無から有を出した方ですから。

さて、私の机の上には、榎本保郎先生の写真と書「今あるは 神の恵み」が置いてあるんです。私の座右の書です。

私は保郎先生ともう一人、四国の金田福一先生を2本のレールに例えているんです。このお二人の先生方の後をついていこうと努力しているつもりです。たまに脱線するんですけども。色々と信仰生活をおくるにあたり、自分よがりでは間違いもあり、やはり先駆者、イエス様に頼って一歩一歩後を追っていく信仰が大事だと思います。

私は8月で90歳になりました。保郎先生とお会いしたのは今から50年くらい前です。

（続く）

（・上野の森キリスト教会
・日光オリーブの里創設者
・ホームレス伝道支援）

金山師の証しの時。保郎師の写真を大切に持ちつつ。

➡ようこそアシュラムセンターへ‼福岡より樋口希姉（常任）のご両親ご来訪。愛犬3匹伴いて。

12月号より続く

初！早天祈祷会での祈り　10月23日

池谷　寿子

愛する天の父なる神様、今日こうして早天に出させていただきましたことを感謝いたします。そして治朗のために全国の方がお祈りをしてくださったことにも感謝いたします。

命の泉というのは本当に素晴らしいことだなと、やっぱり人間が生きていくには苦しんだり悲しんだりもがいたり、それでも主がその中に命の水を必ず一滴でも二滴でも落としてくださる。その時に「あぁよかった、これでまた立ち直れる」という思いで私は今日この聖書を見させていただきました。息子も病気で大変なところを通ってまいりましたけれども、命の水を信じて、主のところに行ったと思います。そしてまた天に行っても、みなさんお一人お一人の上に命の水をあの子なりに注いでくれるんじゃないかと今日本当に思いました。本当にありがとうございました。

このお祈りをイエスキリストの御名を通して感謝して御前にお捧げいたします。

（池谷治朗兄母）

修道場アシュラムやズーム参加の皆様と。みことばに包まれ、涙が溢れ、そして笑顔に。（写真中央）

（ちいろば祈りの家）

黒見妙子姉への哀悼の辞

アシュラムセンター主幹牧師　榎本恵

イエスは主なり

敬愛する黒見妙子姉を、天に見送ってから、数ヶ月の時が過ぎてしまいました。しかし、今も、彼女の声が聞こえてくるような気がします。「あら、嫌だ。先生。本当に来ちゃったの?」いつも、困ったような喜んでいるようなそんな複雑な表情の、妙子姉を思い返しています。彼女の78年の生涯を思うとき、旧約聖書箴言の「主の道は、無垢な人の力」（箴言10：29）とのみ言葉を思い起こします。天に召されるまで、ひたすら主の道を歩み、病の中で不安と恐れと闘いながら、なおも主の道を歩み続けた彼女の姿は、この無垢な人のようではなかったか、私にはそう思えるのです。「あら、先生、そんないいものじゃないわよ」とまた彼女の笑い声が少し聞こえてくるのですが。

11月30日 墓前礼拝。妙子姉を慕う皆様と共に。

しかし、無垢であること、無邪気であること、それは彼女がこんなにも多くの人に愛された理由なのではないでしょうか。自分の思ったように、素直に直感的に生きる、それはある意味自由で、羨ましいことではありますが、同時に、そのことによって周りが振り回されるということも起こってくるでしょう。家族やご友人、また教会や地域にあって、そんな妙子姉の無邪気な振る舞いに、戸惑い、驚かれた方も、少なからずおられたことだろうと思います。普通なら、とっくに見放されてもおかしくないのに、みんな「黒見さんだから仕方ないわね」と言ってしまう。そこには彼女の人徳だなどと言って片付けてしまうことのできないものがあるのではないでしょうか。あらゆることを、軽々と飛び越えることができる、彼女の秘密はどこにあったのでしょう。

私が彼女を見ていて、一つきづくことは、彼女が何か選択する時、それを損か得かでは、選ばなかったのではなかったかということです。人は、誰でもいくらかは、自分にとって、それが利益になるかどうかを考え生きています。口ではきれいごとをいってはみても、実際には、愛に生きることは難しいものです。けれども、黒見さんの場合は、そのところが、人とは違っていた。それが損になるのか得になるのかの損得勘定ではなく、そこに「愛」があるのかどうか。それが、彼女のある意味、選択の基準であり、もっと率直に言えば、「心

「アシュラム誌を通して、センターのお働き、主に在る証し、主の幹に連なる枝の一人として感謝申し上げます。」

家形 日出（世光教会）

「先生、それはまたかいかぶりすぎよ」と彼女の笑い声が聞こえてくるようです。

けれども、妙子さん、あなたはきっと、今、天の御国で、マザーの横に並び、共に、残されたわたしたちに、こう呼びかけるでしょう。「愛とは、大きな愛情を持って小さなことをすることよ、皆さん、頑張ってね」

あとがき

2022年が始まりました。今年の年頭アシュラムの主題は「来てごらんなさい」です。固く閉ざされた、その扉を開け放ち、さあ、来てください。主の招きに応じ、踏み出しましょう。コロナは、決していつまでも私たちを縛り付けるものではないのです。今、新しい年を迎え、心新たにし、飛び出していこうではありませんか。「来なさい。そうすれば分かる」（ヨハネ1：39）のです。アシュラムセンターへ、アンナ祈りの家へ、シメオン黙想の家へ、そして年頭アシュラムへどうぞ来てください。これが今年の始まりに、私に与えられた主の幻（ビジョン）です。（恵）

保郎師のつぶやき

「飛行機の名簿にもれているのも心配ですが、天国行きの名簿にもれていては大変だなあ…」

（アシュラム誌1976年9月号あとがきより。アメリカからの帰り便、搭乗者名もれ…）

を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する」（マルコ12：33）というキリスト教の真髄の教え、そのものであったのではなかったのか。そう思えてならないのです。時には、それが家族やご友人にとっては戸惑いであったり、理解できないことであったかもしれません。しかし、そこには彼女の深い愛があったのではなかったでしょうか。

私達のアシュラムセンターでは、誕生日の祈祷カードというものがあります。そこには、お名前や、住所、そして生年月日とともに、その方の祈りの課題を書いて、提出してもらいます。アシュラムセンターの早天祈祷会では、毎朝、その日の誕生日の方を覚え祈るのですが、毎年提出される黒見妙子姉の祈りの課題は、いつも三人の子供たちが、神様のもとに帰りますようにという祈りでした。ここにある、彼女のカードには、その願いの言葉が、毎年毎年、書き連ねられています。家族の幸せを祈る母親の愛は、黒見さんにとって、ただこの世の幸せではなく、神のもとに帰ってほしいという、清い聖なる祈りであった。私は、そのことこそが、彼女がその生涯通して、祈り願い続けた嘘偽りのない無垢な心であったと思うのです。

さて、彼女は、ある時から、カトリックの信仰を持ち始め、教会も変わっていかれました。今更カトリックにならなくても、思われた方もおられるでしょう。もちろん、教会生活を続けていく上で、さまざまな困難や人間関係の複雑さをお感じになり、決断なされてのことだろうと思います。私も事情を少し知る者として、それは決して単純な決断ではなかったろうことは想像できます。けれども、彼女が、カトリックに改宗し、クリスチャンネーム「テレサ」をいただいたとき、本当に嬉しそうに、また誇らしげに「マザー」とおんなじ名前をいただいたのよと、無邪気に喜ぶ姿には、驚かされたものでした。皆さんもよくご存知のように、彼女の自慢は、マザーテレサと出会ったことでした。そして、そのマザーと同じ名前をつけていただき、そのことを本当に心から無邪気に喜ぶことができる。その幼児のような無垢さこそが黒見妙子姉なのです。

人は、いろいろ損や得を天秤ではかり、勘定し、結局は仕方ない、我慢するしかないと飛ぶことを諦めることが、多いのです。けれども、黒見さんは、羨ましいほど、軽々とそれを飛び越えていかれたのでした。病院を移るときも、家を買われる時も。それは、他人の目には後先考えず行動する者のようにうつったかもしれません。しかし、そこにはいつも深い愛があったのではなかったか。

そしてそれが、彼女が尊敬してやまなかった「マザーテレサ」自身の「神を愛し、人を愛する」姿そのものだったのではなかったのか、私にはそう思えてならないのです。「またまた、先生お上手ね」黒見さんの笑い声が聞こえてきます。

ところで、このマザーテレサの、テレサの名前は、実は、19世紀フランスの修道女、リジューのテレサにちなんでつけられたものでした。別名小さき花のテレサ。彼女は、非常に病弱で、若くして天に召されてしまいます。しかし、神と隣人を愛するために、小さなことを誠実に愛を込めて果たした彼女の書き残した自叙伝は、その死後大きな反響を呼び、のちに彼女は聖人に列せられるのです。マザーテレサは、その最後の手紙の中で、こう書いています。「私たちも自分をとても小さくし、小さき花のテレジアの信頼、愛、そして喜びの道を歩み続けましょう」と。黒見姉の生涯は、まさにこのマザーテレサの、小さき花のテレジアの信頼と愛と、喜びの道を歩み続けたものではなかったでしょうか。なんだかまた、

一年前、療養中にもかかわらず、伊賀姉、中村姉と、センターへの楽しい旅！夕礼拝後、和子母と大笑い！（写真右）

中止、又はオンラインに変更もあり。
ホームページ、電話等でご確認下さい。
直前の変更の場合あり！

１月の聖書教室など

【主な問い合わせ先】
0748 － 33 － 4030
アシュラムセンター

4(火)	Zoom聖書教室（AM10:30、PM7:30）
8(土)	聖書と学ぶ会（Zoom PM8:00）
10(月)	福岡聖書教室（博多クリオコートホテル PM1:30）
16(日)	ちいろば牧師記念チャペル夕礼拝（PM5:00）
17(月)	箴言に学ぶ会（Zoom AM10:30、PM7:30）
18(火)	大阪聖書教室（大阪クリスチャンセンター AM10:30）
19(水)	カフェちいろば聖書入門講座（京都・伏見区深草 PM1:30）
21(金)	センター聖書教室（アシュラムセンター AM11:00）
24(月)	静岡聖書教室（旧・英和女学院宣教師館 AM10:00、PM1:30）
25(火)	東京聖書教室（御茶ノ水クリスチャンセンター４F AM10:30）
26(水)	美しい足の会（Zoom AM10:30、PM7:30）

１月のアシュラムなど

27(木)〜29(土)

第47回 年頭アシュラム

（彦根市 琵琶湖コンファレンスセンター）

奉仕者　榎本恵牧師　（アシュラムセンター主幹牧師）
貴村かたる牧師（日本基督教団 天門教会牧師
・日本クリスチャンアシュラム連盟事務局）

詳しくは、案内チラシをご覧下さい

ご参加お待ちしています！

２月のアシュラム予定

17(木)〜19(土)

2022年 修道場アシュラム①

（アンナ祈りの家、シメオン黙想の家）奉仕者　榎本　恵師

11月修道場アシュラム。東谷兄、島隆三師（センター聖書教室ご奉仕）完成したラビリンスをゆっくり味わい歩かれた。

修道場アシュラム2022のご案内は、アシュラム誌２月号にて。ホームページもご覧下さい。皆様のお申し込みをお待ちしております。

Zoom聖書教室 2022上半期分の受付が始まります。
詳しいご案内・お申し込みはホームページにて。

みことば

ノースカロライナ大学院生
Zoom聖書と学ぶ会
榎本　空

とんとんみ〜のおかあさんとあかちゃん
（伊江島にて 空３才）

信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。
ヘブライ人への手紙11章1節

人は、自分が望んでいるものが本当に何であるのか、案外確信できないものである。今日は唐揚げを作ろうと鶏肉を切り始めても、やっぱり親子丼にしようか。ハンバーガーを食べようと家を出たのはいいけれど、今日はサンドウィッチの気分なのかもしれない。まったく気持ちは変わっていく。

2022年は、私が海外に出て10年目の年だ。ちょうど今、その間の生活について本を書いていて、10年前、自分は何を望んで日本を離れたのだろうかと、よく考えている。何か立派な確信があったわけではなく、何を望んでいるのか自分でも分からなかった。しかし、こうして今、10年という時を振り返ってみると、自分のちっぽけな想像力で望んだよりも、はるかに豊かな出会いと経験が与えられたことに驚きを覚えてしまう。もし、望んでいる事柄に何か確信があるとしたら、それは人間の望みを超えて神が働かれるということへの確信なのかもしれない。この新しい年に、私たちは何を望むのだろうか。新しい本を楽しみにしていてほしい。

（次号につづく）

←加古川祈りの家、（小林清子姉宅にて）始まり、感謝です！